

JSTA 日本熱帯農業学会

熱帯農業研究

Vol. 1, Extra issue 2

日本熱帯農業学会第104回講演会

- I. 研究発表要旨
- II. シンポジウム要旨



2008年10月18日・19日

会場 鹿児島大学 農学部共通棟

Oct. 18, 19 2008

35. チベットと香格里拉地方のチベット族の農具と作付体系に関する調査ノート

安藤和雄 (京大東南ア研)

Survey Note on Agricultural Tools and Cropping Systems of Tibetan People
in Tibet and Shangrila ANDO, Kazuo (CSEAS, Kyoto Univ.)

キーワード: チベット犁、チベット自治区、香格里拉、作付体系、チベット文化圏

1. はじめに一問題意識・調査地・調査方法— チベット文化圏は、ネパール、インド北部や北東部、中国のチベット自治区、雲南、甘肅、四川、青海の各省に広がっている。チベット語系の言語を話し、チベット仏教ならびにボン経を信仰する人々は 1500m~4500m 前後の標高に居住し、稲、トウモロコシ、小麦、大麦、シコクビエなどを栽培する農耕や、ヤク、ヒツジの牧畜、湖・河川での漁業などの生業を高度差の違いで多様に展開していることが注目されてきた。複数の国家と地域をまたぐチベット文化圏は外国人の調査が制限されてきたことも手伝い、地理的多様性は高度差の多様性ほど注目されて来なかった。地理的多様性を明らかにしていくために、中国のチベット自治区ラサ周辺、雲南省香格里拉(シャングリラ)地方のチベット族(中国では藏族<チャンツー>と呼ばれている)の住む村での農具と作付体系の調査結果を報告する。調査は、2005年8月27日~9月4日:ラサ周辺、9月13日~19日:シャングリラ周辺で見聞を行った。チベットでは、英語-チベット語のチベット族の人の通訳により聞取を行った。シャングリラでは、雲南省社会科学院東南アジア研究所孔建勳さんに英語-漢語の通訳をお願いし、漢語の理解できる村人から話を伺った。標高はGPS(機種SUMMIT)で測定した。農具の表記は、安藤が聞取った発音である。聞取調査は、ラサ周辺では、空港近くのガンドインGandoyn村(標高3469m、以下同様)、市内のデュロングDurong村(3595m)、市外のニヤダンNyadan村(3533m)、ドロングDronga村(4056m)で、シャングリラでは、建塘鎮の村宗(チェンゾンChenzon)村(3080m)、尼西郷のチャントChanto(Qiang)村(2758m)、小中甸郷の和平(Huoping)村(3136m)、隣の県の徳欽県云嶺郷の斯農(Sinong)村(2042m)で行った。

2. 調査結果(1)地形 ラサの周辺は、ブラマプトラ川の本流、支流がつくる谷底平野もしくは、谷沿の傾斜地形に耕地と集落が分布していた。シャングリラでは、メコン川の上流、支流の谷沿いに斯農村、チャント村が位置し、他の村は、ゆるい起伏をもつが平らな高原に位置していた。

(2)ラサでの調査 ドロンガ村で自称84歳の男性の村人Nさんによれば、Nさんの家の耕地では標高が高いので、小麦を作らず大麦とナタネをつくっている。調査時に大麦の収穫を行っていた。ナタネの収穫は、大麦より10~11日前に行なった。村有の7~8個の小さなため池から村の約3割の耕地を灌漑する。雨が少ない時に、3月、畑に犁を入れる前と、除草後の6月に灌漑する。ナタネは灌漑しない。大麦の耕地では、収穫後に、1960年代に政府から普及された新しい型の鋳鉄の犁先と犁へらで土を反転させる中国犁を原型とするチャシュエイ(Cha Shuei、チャ=鉄、シュエイ=犁)(写真1)で耕し、3月に鋳鉄の犁先をもつインド犁を原型とするチベット犁であるペシュエイ(Pe Shuei、ペ=チベット人)(写真2、写真3は犁先)で耕す。犁溝に種播し梯子型の木製の梯子型まぐわであるシャラ(Shalla)(写真4)をかけて覆土均平作業を行う。5、6月に手で除草する。ニヤダン村の47歳の女性(ニヤダン村育ち)によれば、ニヤダン村では、チベット犁は現在使われていない。村では、大麦と小麦を主に栽培する。3月に播種し、8月下旬~9月上旬に収穫する。収穫された穂つきの麦の刈り束は、背丈ほどの小山のチョウで耕地に10月まで放置され、以前はヤクで踏ませたが、現在は電気の動力で脱穀する。播種方法は、Nさんの聞取と同じであるが、まぐわで覆土均平後に、犁で灌漑用の水路を耕地の中につくり、鋤でならず。小麦も大麦も4~7月の間に、雨の少ない時は、月に2~3回、雨が多いときは、1回、灌漑する。デュロング村での35歳の女性の話では、村では犁(Shuei)は、新しい反転犁(ガシュエイGa Shuei)のみを使い(写真5)、まぐわを使わずに、数本の歯の木製の鋤で覆土する。3月~5月に3回灌漑する。

(3)シャングリラ地方での調査 シャングリラ地方では、犁をトンバ(Tomba)という。和平村での聞取りでは、伝統的な犁をシェントンバShen Tomba(シェン=木)、10年前に入った新しい犁へらをもった犁をチャトンバCha Tomba(チャ=鉄)(写真5と同型)と呼んでいる。現在では、チャトンバがヤクや牛の二頭びきもしくは、トラクターに引かせて使用されている。まぐわは使われていない。村宗村でも耕作方法、栽培作物は同様に、大麦を3月播種、9~10月収穫、カブの一種を6月播種、10月収穫、ジャガイモを4月植付、10月収穫、ナタネとソバを4月播種、9月収穫する。雨が多いので無灌漑である。播

種後の覆土均平は平鋤で行う。一本歯の鋤具での手取除草が、大麦では3回も行われていることを聞取った。大麦-カブ/ジャガイモ-ナタネ/ソバ-大麦と輪作されている。10月~2月の間、雪が降る。シャングリラ地方では今ではシェントンバはほとんど使われていない。徳欽県地方で使われている。徳欽県に隣接するチェットン村では現在も使われている。チェットン村のRさん(60歳)によれば、村ではシェントンバもトンバと呼んでいる(写真6)。犁先は鍛鉄である。棚田と段畑で犁を使う。谷底の平らな耕地ではトラクターを使う。棚田は20~30年前につくられた。畑では1年目トウモロコシ-休閒、2年目ジャガイモ-休閒あるいはトウモロコシ-冬小麦/大麦の二毛作、水田では稲-ヒマワリ/カブ/ジャガイモ/小麦・大麦の二毛作をする。水田がつくられる前は、夏作に、小麦、大麦、ソバが栽培されていた。現在、ソバは水稻にかわり、小麦と大麦の夏作は少なくなりつつある。畑も水田も灌漑している。まぐわは使わず、鋤のみで覆土・均土する。斯農村では、5年前からブドウ栽培が、それ以前は、トウモロコシ-冬小麦/大麦の灌漑による二毛作が盛んであった。まぐわを使わず、鍛鉄の小さな犁先のトンバを使っていたが、5年前から徳欽の店から鑄鉄の犁へらをもつ大きな犁先をつけるようになり(写真7)、2年前から犁を止めトラクターで起こしている。標高が低いので雪は降らない。

3. 考察 ラサ地区とシャングリラ地方の伝統的なチベット犁は鍛鉄の犁先をもったインド犁を原型としている。ラサ地域では大きな犁先の長床犁と梯子型のまぐわが使用されている。シャングリラ地方では、まぐわを用いずに、平鋤と短床犁が使われている。両地域とも鑄鉄の犁先である中国犁がチベット犁にかわりつつある。斯農村では中国犁の犁先がチベット犁に用いられるという技術展開があった。中国犁の犁先を使ったのは「速く、多く耕すことができる」(斯農村の42歳の女性Tさん)、小さい鍛鉄の犁先は「山の石が多い耕地で使う」(徳欽の街の鍛冶屋)という。まぐわが、シャングリラ地方では使われていないことは、まぐわと犁が必ずしもセットとなった技術ではないことを示唆し興味深い。



写1



写2



写5



写3



写4



写6



写7